

# 青年期の孤独感 —— 孤独感と社会的傾性 ——

## A Study of Loneliness in Adolescence

吉 山 尚 裕

Naohiro Yoshiyama

### ABSTRACT

This study examined the relationship between loneliness and various aspects of consciousness in adolescence. Six scales were administered to the first grade students in a school of nursing and a college ( $N=136$ ). The scales were Loneliness Scale (LSO; Ochiai, 1983), Life Attitude Scale (Nishihira, 1983), Feeling of Togetherness Scale (Sorifu, 1983), Independence Consciousness Scale (Kato & Takagi, 1980), Trait Anxiety Scale (Shimizu & Imae, 1981), and Adult Characteristic Scale (Tsuru, 1964). The major findings were as follows. 1) Type A or D students classified by LSO showed more positive attitude toward life and society, higher feeling of togetherness and consciousness of independence, compared with type B or C. 2) Four types of group were separated according to the results of Quantification of Response Pattern. Type A group showed positive attitude toward life and society, on the other hand, type C group showed negative and unreliable attitude toward life and society. And also, type D group showed high consciousness of independence and low anxiety, on the other hand, type B group showed low consciousness of independence and high anxiety.

Key words : Loneliness Scale by Ochiai (LSO), loneliness, life-attitude, feeling of togetherness, consciousness of independence, anxiety, adult characteristics.

### 問 題

本研究の目的は、青年期における孤独感が、友人や仲間あるいは社会との関わり方に関する意識とどのように関連しているかを検討することである。具体的には、人生態度、連帯感、孤立性、不安感、成人特性などの傾性をとりあげ、孤独感との相互連関について検討した。

かつて、Spranger (1924) が『青年ほど、その独房から憧れの目をもって窓の外をながめているものはない。青年ほど、その深い孤独のうちに接触と理解を渴望しているものはない。青年ほど遠方に立って、大声で呼んでいるものはない』と述べたように、孤独感は青年期の基

本的な生活感情の一つである。従来、孤独感に関する研究は臨床的観察に基づくものが多く実証的な研究は乏しかった。しかし、孤独感の研究は健全な社会的関係のあり方を示唆し、親密さや友情など対人関係の研究に新たな視点と洞察を与える。こうした理由から、孤独感に関する研究は近年とくに注目され、1970年代の後半から数多くの実証的研究が行われるようになってきた。

Peplauら UCLAの研究グループ (Peplau & Perlman, 1979) は、UCLA孤独感尺度 (Russell, Peplau, & Cutrona, 1980) を作成した。その後、この尺度を用いて孤独感と自尊感情、自己意識、社会的不安、セルフ・モニタリング傾向など様々な個人的傾性との関連が検討されている。その結果、孤独感とは、自尊感情と負の関係 (工藤・西川, 1983; 諸井, 1985, 87; Russell et al., 1980)、自己意識と正の関係 (Jones, Freemon, & Goswick, 1981; 諸井, 1985, 87)、社会的不安と正の関係 (Jones et al., 1981; 諸井, 1985, 87)、セルフ・モニタリング傾向と負の関係 (諸井, 1985, 87) があるなど、自己の様々な意識状態と関連していることが明らかにされている。

他方、わが国では落合 (1974, 1983a) が青年期の孤独感の構造を解明するために文章完成法による予備調査を行い、孤独感に関する60項目の質問紙を作成、結果をQテクニクによって分析した。その結果、孤独感とは、(1)人間同士理解・共感しあえると感じているか、(2)自己 (人間) の個性に気づいているか、の2次元の構造をなしていることを明らかにした。そして、その2つの次元に沿って現代青年の孤独感の在り方を、A型、B型、C型、D型の4つのタイプに類型化することが妥当であると結論している (Figure 1 参照)。

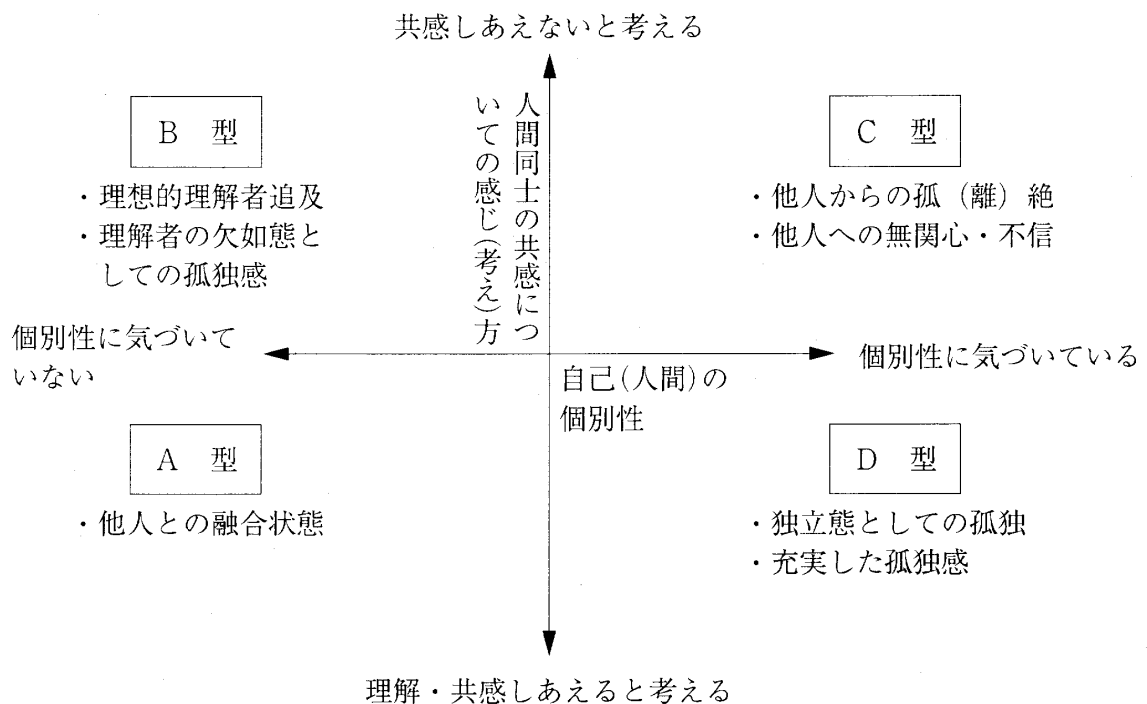


Figure 1 孤独感の類型と4つの類型 (落合, 1974)

ここで、落合（1974, 1983a）の言う、各孤独感類型の特徴を述べてみよう。A型は、「人間同士理解・共感しあえるものだと思っていて、かつ人間（自己）の個別性には気づいていない型」である。この型は他人と情緒的・依存的な“融合状態”の中にいるため孤独感を感じていない型とされる。B型は、「人間同士理解・共感しあえないものだと思い、かつ人間の個別性には気づいていない型」である。この型は自分の感情や思考をそのまま理解してくれる人はいないと感じている。しかも単独者としての人間存在に目覚めていないために、他人に裏切られたといった感情をいだきやすい“理解者の欠如形態”としての孤独感とされる。C型は、「自己（人間）の個別性に気づき、かつ人間同士理解し共感しあえないと思っている型」である。この型は“人間は元来一人ぼっち”と考え、自分を理解してくれる人を求めることは不可能であると諦めた孤独感とされる。最後にD型は、「自己（人間）の個別性に気づき（自覚し）、かつ人間同士共感しあえると思っている型」である。人間は、一人一人個別であり、独自性を持ったものである以上、誰もその個人（自分）にとってかわることはできない。人間は共感することによってしか理解しあえないから孤独なのだ、という考えから生じる孤独感である。すなわち、D型の孤独感とは人間の存在の姿をあるがままに見つめ、引き受けていることによって生ずる孤独感であり、他者との連帯を必然的に伴う充実した状態とされる。

その後、落合（1983b）はこれらA～D型の類型を判別するために、大学生を対象にして孤独感の測定尺度（Loneliness Scale by Ochiai; 以下、LSOと略す）を作成した。LSOは、「人間の理解・共感の可能性についての感じ方の次元（U尺度）」と「人間の個別性の自覚についての次元（E尺度）」の2つの次元から構成され、その組合せによって孤独感のタイプが分類される。LSOの特徴は、対他次元（人間同士の理解・共感の可能性）と対自次元（自己の個別性の自覚）という2つの次元から多面的に孤独感を捉えようとする点にある。

しかしながら、LSOを用いて孤独感と他の様々な傾性との関連を検討した研究は少ない。落合（1983b）では、LSOの基準関連妥当性の検討において、LSOの下位尺度であるU尺度（理解・共感の可能性についての感じ方の次元）、およびE尺度（人間の個別性の自覚についての次元）と向性との関係が検討されている。その結果、LSOの各下位尺度の高得点群は、低得点群よりもYG性格検査の下位尺度である思考的外向性と社会的外向性の得点が低かった。しかし、落合（1983b）が述べているように、向性だけでなく孤独感と他の様々な傾性との関連を幅広く検討し、孤独感の各類型の特徴を明らかにしていくことが必要であろう。

そこで、本研究では、LSOで類型化されるA～Dの各タイプの青年が、とくに周囲の他者や社会との関わり方について、どのような意識傾向を持っているのかを検討する。孤独感の在り方は、社会的関係への傾性を規定していると考えられるとともに、逆に、孤独感とは社会的関係についての傾性に由来すると考えられるからである。また、他者や社会との関わり方と孤独感の相互関連を吟味することにより、孤独感の特徴をより深く明らかにすることができると考えられる。ここでは、孤独感との関連が予想される傾性として、人生態度、連帯感、独立意識、不安感、成人特性をとり上げ、孤独感との相互連関について検討した。

## 方 法

調査対象者：看護専門学校1年生の女子52名（調査時期は1989年6月）と短期大学1年生の女子84名（調査時期は1992年10月）の計136名が調査の対象者となった。調査は“青年期の

意識”に関する調査として、いずれも講義時間を利用して2回に分けて実施された。

測定尺度：実施された心理尺度は次の通りである。

1. 孤独感尺度：落合（1983b）による孤独感尺度(LSO)の16項目(U尺度9項目、E尺度7項目)。孤独感尺度の質問項目については、APPENDIXに掲載する。なお回答は5件法により行われた。
2. 人生態度尺度：西平（1988）による人生態度尺度20項目。項目例としては、“人間として生まれてきた以上、何か社会のために尽くしたいと思う”、“きまじめで遊びを知らないような生き方はしたくない”などである。この尺度は5項目ずつ、「理想主義的な自己形成指向(A型)」「自己陶酔的な自己追究(B型)」「虚無的な拒絶(C型)」「体験主義的な感性追究(D型)」の下位尺度から構成されている。回答は5件法により行われた。

人生態度尺度では、「自己形成－感性追究」「信頼－不信」という2つの軸が仮設的に想定されている。自己形成とは理想的自己の形成を目指す未来志向的な生き方を指し、感性追究とは、そうした生き方を否定して現在の感情におもむくままに生きようとする態度を指す。信頼とは、自分の人生や生活に希望をいだき社会に信頼を寄せている生き方であり、不信とは人生・生活・社会に対して基本的な不信感を底流にもって生きていることを指している。人生態度の各類型のうち、A型は“自己形成と信頼”、B型は“自己形成と不信”、C型は“感性追求と不信”、D型は“感性追求と信頼”に対応している。
3. 連帯感尺度：総理府青少年対策本部（1981）による連帯感尺度10項目。項目例としては、“世の中は助け合いなのだから、私は自分の生活を少しぐらい犠牲にしても、社会奉仕に参加するつもりだ”、“私は無力な存在だが、みんなで力を合わせれば、相当なことができるものだと思う”などである。回答は3件法により行われた。
4. 独立意識尺度：加藤・高木（1980）による独立意識尺度のうち、尺度I（第I因子）の「自己の独立性」の10項目。項目例としては、“自分自身の判断に責任をもって行動することができる”、“生きることの意味や価値を自分で見出すことができる”など。回答は5件法により行われた。
5. 不安感尺度：清水・今栄（1981）によるState-Trait Anxiety Scale(STAI；Spielberger,Gorsuch,& Lushene,1970)の日本語版から、長期的な性格特性としての不安水準を測定するA-Trait尺度の20項目。項目例としては、“実際に大したことないことが気になってしかたがない”、“物事を難しく考える傾向がある”などである。回答は4件法により行われた。
6. 成人特性尺度：都留（1964）による成人特性尺度から女性用の19項目。項目例としては、“小説や映画は恋愛ものが好きである”、“衣服や持ち物の流行を気にする方である”、“感激したり感動したりすることはまれである”などである。回答は3件法により行われた。

Table 1 得られた標本における各心理尺度の平均値，  
標準偏差 (SD)，範囲

尺 度	平 均	標準偏差	範 囲
孤 独 感			
U得点	10.5	5.4	-4 — 18
E得点	1.6	4.5	-8 — 11
人 生 態 度			
A得点	18.1	2.8	10 — 25
B得点	16.1	3.0	7 — 24
C得点	11.3	3.0	5 — 22
D得点	15.9	2.9	7 — 23
連 帯 感	1.3	3.2	-7 — 9
独 立 意 識	33.5	5.9	13 — 47
不 安 感	45.8	8.9	22 — 69
成 人 特 性	-2.6	4.7	-14 — 10

- 1) 孤独感尺度 U得点…人間同士の理解・共感の可能性  
E得点…人間の個性についての自覚  
人生態度尺度 A得点…理想主義的な自己形成，B得点…自己陶酔的な自己追究，  
C得点…虚無的な拒絶，D得点…体験主義的な感性追究

## 結果と考察

結果の分析にあたっては、次の3つの統計的処理<sup>1)</sup>を行なった。第1に、LSOの下位尺度であるU尺度とE尺度と他の心理尺度と相関分析。第2に、LSOのA～Dの各類型別に集計した各尺度の平均値の比較。第3に、LSOの各類型および他の尺度値の高群、低群をカテゴリー変数として投入した「パターン分類の数量化」による分析である。Table 1には得られた標本における各心理尺度の平均値、標準偏差(SD)、範囲を示している。

### 1. 相関分析

LSOの2つの次元である「人間同士の理解・共感の可能性(U)」と「自己(人間)の個性への自覚(E)」が、人生態度、独立性、連帯感、不安感、成人特性とどのように関連しているかを検討するため、U尺度及びE尺度との相関係数(ピアソン相関)を算出した。なお人生態度尺度については下位尺度の得点ごとに相関係数を算出した。

Table 2に示した相関係数のうち、±.300以上のものについて述べれば次のようになる。まずU尺度は、人生態度のA得点(理想主義的な自己形成)、連帯感、独立意識と正の相関を持ち、人生態度のC得点(虚無的な拒絶)とは負の相関を持っていた。これに対してE尺度は、

1) 本研究のデータの整理・分析は、九州大学大型計算機センターにおいて、SPSS-Xプログラムパッケージを用いて行なった。

Table 2 孤独感尺度の下位尺度と各心理尺度との相関

尺 度	孤 独 感 の 下 位 尺 度	
	U 尺 度	E 尺 度
人 生 態 度		
A得点	.313**	.083
B得点	-.134	.427**
C得点	-.499**	.239**
D得点	.137	-.082
連 帯 感	.396**	-.323**
独 立 意 識	.387**	-.116
不 安 感	-.286**	.109
成 人 特 性	.201	.015

1) 孤独感尺度 U尺度…人間同士の理解・共感の可能性

E尺度…人間の個別性についての自覚

人生態度尺度 A得点…理想主義的な自己形成, B得点…自己陶酔的な自己追究

C得点…虚無的な拒絶, D得点…体験主義的な感性追究

2)  $N=136$ , \*\* $p<.01$ ,

人生態度尺度のB得点（自己陶酔的な自己追究）と正の相関をもち、連帯感とは負の相関をもっていた。

これらの結果から、LSOの対他次元(U)について言えば、人間同士理解・共感しあえると感じている者ほど、生活・人生・社会に対して肯定的な態度を示し、連帯感が強く、独立意識も高い傾向にある。また、LSOの対自次元(E)については、自己（人間）の個別性に気づいている者ほど、人生・生活・社会に対して否定的な態度を持ち、連帯感が弱い傾向にあると言える。

## 2. 孤独感の類型別に見た各尺度値の比較

では、U尺度とE尺度を組み合わせる分類される孤独感の各類型(A～D型)の特徴を比較してみよう。なお、Table 1に示したように孤独感尺度に関して、落合(1983b)の類型判別基準（各尺度の合計点の midpoint を基準とする）をそのまま適用するとB型、C型に分類される被験者の数が極めて少なくなる。そこで、以下の分析では、得られた標本におけるU尺度、E尺度の平均値を用いて被験者の分類を行った。

Table 3には、孤独感の類型別(A～D型)に集計した各尺度の平均値(SD)、ならびに分散分析と多重比較(Tukey法)の結果を示している。統計的に有意差が得られた尺度について述べてみよう。まず人生態度について、A得点(理想主義的な自己形成)は孤独感類型のD型が他の類型に比べて最も高く、B得点（自己陶酔的な自己追求）はC型がA型やB型に比べて高かった。さらにC得点(虚無的な拒絶)はB型とC型がA型やD型に比べて高かった。次に、連帯感についてはC型が他の類型に比べて最も低く、独立意識についてはA型とD型がB型と

Table 3 孤独感の類型にみた各心理尺度の平均値の比較

尺 度	孤 独 感 の 類 型				分散分析	多重比較
	A型 (n=42)	B型 (n=25)	C型 (n=35)	D型 (n=34)	F 値	
人生態度						
A得点	17.9 (3.1)	17.4 (2.3)	17.3 (2.5)	19.8 (2.2)	6.53**	A,B,C<D
B得点	15.0 (3.1)	15.5 (2.6)	17.4 (2.8)	16.5 (2.7)	5.35**	A,B<C
C得点	9.9 (2.6)	12.5 (3.2)	12.8 (2.9)	10.8 (2.7)	8.59**	A,D<B,C
D得点	16.2 (2.9)	15.6 (3.0)	15.4 (2.7)	16.3 (3.1)	0.75	
連 帯 感	2.6 (2.5)	1.1 (2.8)	-1.0 (2.7)	2.2 (3.6)	11.38**	C<A,B,D
独立意識	35.3 (6.0)	31.7 (4.5)	31.1 (6.7)	34.9 (4.8)	5.13**	B,C<A,D
不 安 感	43.8 (9.3)	49.2 (8.6)	48.5 (8.8)	43.1 (7.1)	4.34**	A,D<B,C
成人特性	-1.4 (4.4)	-4.4 (5.2)	-3.1 (4.3)	-2.4 (4.9)	2.32+	

1) 人生態度尺度 A得点…理想主義的な自己形成, B得点…自己陶酔的な自己追究  
C得点…虚無的な拒絶, D得点…体験主義的な感性追究

2) ( ) = SD, \*\* $p < .01$ , + $p < .10$

3) 多重比較は(Tukey法)は、5%水準以上で有意

C型に比べて高かった。不安感については、B型とC型がA型やD型に比べて高い。成人特性はB型が最も低かったが統計的には傾向差の水準であった。

これらの結果から、孤独感類型のB型とC型はA型やD型に比べて、生活・人生・社会に対して否定的な人生態度を持っており、連帯感や独立意識も低いことが明らかになった。孤独感の在り方が、友人や仲間などの身近な人間関係のみならず、独立意識という青年期の発達課題とも関わっている点は興味深い。また、B型とC型は不安感が高く、適応上も望ましくない傾向を持っていると言えよう。

### 3. パターン分類の数量化による分析

各々の心理尺度の結果を個別に検討するのではなく、各心理尺度の結果の全体的な関連を吟味するために、林(1982)の「パターン分類の数量化(数量化Ⅲ類)」によって解析した。

「パターン分類の数量化」とは、多くの変数の相互関連性を検討するために、各変数(カテゴリー)に数値を与えることによりカテゴリー間の関連性を解析する手法である。その際、次のような原則の下に数値を計算する。すなわち、カテゴリーAに該当する標本の多くがカテゴリーBにも該当するという関係にある場合には、AとBに似かよった数値を与え、カテゴリーAに該当する標本の多くがカテゴリーCには該当しないという関係がある場合には、AとCにかけ離れた数値を与える。従って関連の強いカテゴリーは近くに、関連の弱いカテゴリーは遠くに布置されることになる。

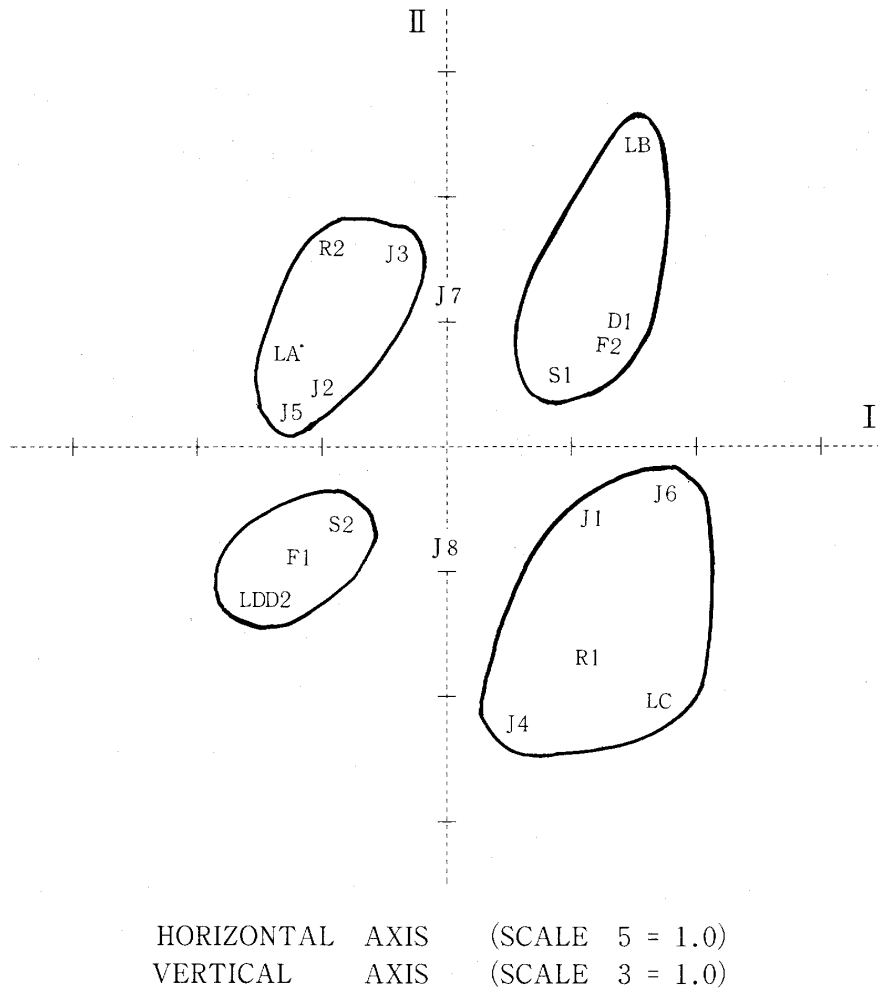


Figure 2 パターン分類の数量化の結果

1) 各カテゴリーと記号

孤独感……A型-LA, B型-LB, C型-LC, D型-LD

人生態度……理想主義的な自己形成(低-J1, 高-J2),

自己陶酔的な自己追究(低-J3, 高-J4)

虚無的な拒絶(低-J5, 高-J6), 体験主義的な感性追究(低-J7, 高-J8)

連帯感……低-R1, 高-R2: 独立意識……低-D1, 高-D2

不安感……低-F1, 高-F2: 成人特性……低-S1, 高-S2

Figure 2 には、「パターン分類の数量化」の結果が示されている。なお、カテゴリー変数の作成にあたっては、LSOについてはA～D型の4カテゴリーを作成し、その他の尺度(人生態度の下位尺度も含む)については、各々平均値によって高群、低群の2つのカテゴリー変数を作成した。Figure 2 によれば、孤独感の各類型を中心に大きく4つのグループに分類できよう。

まず、左上のグループは、孤独感類型のA型(LA)を中心にしたグループである。近接するカテゴリーは、J2(理想主義的な自己形成志向・高)、J3(自己陶酔的な自己追究・低)、J5(虚無的な拒絶・低)、R2(連帯感・高)である。このグループの特徴は、友人・仲間など身近な人に対して積極的な態度を持っているとともに、生活・人生・社会に対して肯定的、信頼的である。



次に、左下のグループは、孤独感類型のD型(LD)を中心にしたグループである。近接するカテゴリーは、D 2 (独立意識・高)、F 1 (不安感・低)、S 2 (成人性・高)である。このグループの特徴は、独立意識が高く、不安感が低く、成人として成熟した特性を備えている。A型とD型は、対他次元ではともに“人間同士理解・共感しあえる”と感じているタイプであるが、対自次元である“人間の個別性の自覚”の度合いが異なることによって、かなり違った心理的特徴を持っていることが示唆された。

右下のグループは、孤独感類型のC型(LC)を中心にしたグループである。近接するカテゴリーは、J 1 (理想主義的な自己形成・低)、J 4 (自己陶酔的な自己追求・高)、J 6 (虚無的な拒絶・高)、R 1 (連帯感・低)である。このグループは、理想的自己の形成を目指すよりも現在の感情におもむくままに生きようとする人生態度を持ち、人生や社会に対して否定的で連帯感も弱い。

最後に、右上のグループは、孤独感類型のB型(LB)を中心にしたグループである。近接するカテゴリーは、D 1 (独立意識・低)、F 2 (不安感・高)、S 1 (成人性・低)である。このグループは、D型(LB)を中心としたグループと対照的に、成人として未成熟な傾向にあり、独立意識が低く、不安感が高いといった適応不全的な特徴が見られる。

以上のように、「パターン分類の数量化」によって、孤独感のタイプを中心に4つのグループに分類できた。Figure 2のⅠ軸は「人間の理解・共感の可能性についての感じ方の次元(U次元)」に、Ⅱ軸は「人間の個別性の自覚についての次元(E次元)」に対応していると思われる。結果が示すように、A型とD型は必ずしも類似したタイプではない。A型は、人生・生活・社会に対して肯定的で連帯感も高く、落合(1974)の言う“他者との情緒的融合状態”に対応したタイプと考えられるのに対し、D型は独立意識が強く、“一人でいることに充実感”を感じているがゆえに不安感も低いタイプであると言えよう。また、B型は独立意識の低さや不安感の高さによって特徴づけられるのに対し、C型は人生・生活・社会への否定的態度と連帯感の低さによって特徴づけられる。B型は“理解者の欠如形態”というよりは、むしろ現実吟味の乏しさを反映しているのかもしれない。また、C型は落合(1974)の言う“人間は元来一人ぼっち”という見方を持つタイプに対応していると考えられる。

## 要 約

本研究では、孤独感尺度(LSO)によって類型化されるA～Dの各タイプの青年が、周囲の他者や社会との関わり方に関して、どのような傾性を持っているのかを検討した。主な結果は次の通りである。

- (1) 相関分析によると、LSOの対他次元(U)において、人間同士理解・共感しあえると感じている者ほど肯定的な人生態度を持ち、連帯感や独立意識も高い。これに対し、対自次元(E)において、自己(人間)の個別性を強く意識している者ほど、否定的な人生態度を持ち連帯感が弱く、不安感が高い傾向にあった。
- (2) 孤独感の類型別(A～D型)に各尺度の平均値を比較すると、A型とD型が生活・人生・社会に対して肯定的な態度を持ち、連帯感や独立意識も高く不安感は低い。これに対し、B型とC型は生活・人生・社会に否定的で不信感を持ち、連帯感や独立意識も低く不安感が高かった。

- (3) 「パターン分類の数量化」によれば、A型を中心にしたグループ（人生・生活・社会に肯定的で連帯感が強い）、B型を中心としたグループ（独立意識が低く不安感が高い）、C型を中心にしたグループ（人生・生活・社会に否定的で連帯感が弱い）、D型を中心としたグループ（独立意識が高く不安感は低い）の4つのグループに分類できた。

総じて、A型とD型はB型やC型に比べ、生活・人生・社会に肯定的であり、友人や仲間など身近な人間関係に積極的で、独立意識も高かった。しかしながら、「パターン分類の数量化」の結果が示すように、A型とD型は必ずしも類似したタイプではない。A型は、人生・生活・社会に対して肯定的で連帯感も高く、“他者との情緒的融合状態”にあるタイプと考えられるのに対し、D型は独立意識が強く“一人でいることに充実感”を感じているがゆえに不安感も低いタイプであると言えよう。B型とC型については、B型が独立意識の低さや不安感の高さによって特徴づけられるのに対し、C型は人生・生活・社会への否定的態度と連帯感の低さによって特徴づけられた。

LSOの対他次元（人間同士の理解・共感の可能性）と対自次元（自己の個別性の自覚）の組合せによって孤独感の特徴はかなり異なっている。この点は、UCLA尺度を用いた研究からは明らかにされていない結果であり、今後、この二つの次元の組合せによって孤独感の様態にどのような違いが生み出されるのか、より詳細に検討していく必要がある。また従来、孤独感是不安感など適応不全とも関連することが明らかになっているが、本研究では、孤独感が独立意識という青年期の発達課題とも関連していることが示唆された。今後は、孤独感が日常生活の中で、対人行動や社会的ネットワークなどどのように関わっているかも明らかにしていく必要があろう。

## 引用文献

- 林知己夫 1982 数量化理論とデータ処理 朝倉書店
- Jones, W. H., Freemon, J. E. & Goswick, R. A. 1981 The persistence of loneliness: Self and other determinants. *Journal of Personality*, 49, 27-48.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究（Ⅰ） 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究, 56, 237-240.
- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, 26, 151-161.
- 西平直喜 1983 現代青年の「人生に対する構え」の因子分析的研究 青年心理学方法論 有斐閣 Pp.69-89.
- 落合良行 1974 現代青年における孤独感の構造（Ⅰ） 教育心理学研究, 22, 162-170.
- 落合良行 1983 a 現代青年における孤独感の構造（Ⅱ）——その発達的变化の検討を中心にして—— 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学編）, 33, 189-203.
- 落合良行 1983 b 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成 教育心理学研究, 31, 332-336.
- Peplau, L. A., & Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In M. Cook, & G. Wison (Eds.), *New approaches to social problems*. California: Jossey-Bass Publishers. Pp.53-78.

- Russell,D.,Peplau,L.A.,& Cutrona,C.E. 1980 The revised UCLA Lonliness Scale :  
Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality  
and Social Psychology*,39, 472-480.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版（大  
学生用）の作成 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 総理府青少年対策本部（編） 1981 連帯感スケールによる分析 10年前との比較からみた現  
代の青少年 — 青少年の連帯感などに関する調査報告書 — 大蔵省印刷局  
Pp. 143-180.
- Spielberger,C.D.,Gorsuch,R.L.,& Lushene,R.E. 1970 *Manual for the State-Trait  
Anxiety Inventory(Self-Evaluation Questionnaire)*. Palo Alto, California:  
Consulting Psychologists Press.
- Spranger,E. 1924 *Psychologie des Jungendalters*. Quelle & Meyer.
- 都留 宏 1964 成人特性の発達 — 青年期の終期測定の研究Ⅱ — 教育心理学研究, 12, 193  
— 201.

## APPENDIX

〈LSO : Lonliness Scale by Ochiai〉

1. 私のことに親身に相談になってくれる相手はいないと思う(U)
2. 人間は他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う(U)
3. 私のことをまわりの人は理解してくれていると、私は感じている(U)
4. 私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている(U)
5. 結局、自分は一人でしかないと思う(E)
6. 私の考えや感じを何人かの人にはわかってくれると思う(U)
7. 私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う(U)
8. 自分の問題は、最後は、自分で解決しなくてはならないのだと思う(E)
9. 人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う(E)
10. 私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う(U)
11. 結局、人間は、一人で生きるように運命づけられていると思う(E)
12. 私とまったく同じ考えや感じを持っている人が、必ずどこかにいると思う(E)
13. 私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う(E)
14. 誰も私をわかってくれないと、私は感じている(U)
15. 人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う(U)
16. どんな親しい人も、結局、自分とは別個の人間だと思う(E)